

平成 23 年度 第 1 回三重県教育改革推進会議第 2 分科会 議事録

I 日 時 平成 23 年 8 月 11 日 (木) 14 : 35 ~ 16 : 35

II 場 所 プラザ洞津「紅葉の間」

III 出席者 (委 員) 太田 浩司、奥田 清子、末松 則子、杉浦 礼子、土肥 稔治、
松岡 美江子、向井 弘光
(事務局) 山口副教育長、齋藤高校教育室長、藤田教育改革室長、
加藤、森田、井坂、岡田、辻、北村、寺 以上 17 名

IV 内 容

(副教育長)

ただいまから、第 2 分科会を開催させていただきます。

本日は最初の会議でございますので、座長を選任していただくまでの間、私の方で進行させていただきますので、よろしくお願いします。自己紹介となっておりますが、時間の都合で省略させていただきます、審議に時間を十分かけていきたいと考えております。座長は委員互選ということになっていますが、いかがでしょうか。(事務局一任)

では、座長は事務局一任ということでよろしくお願いします。(承認)

事務局としては杉浦委員でお願いしたいと考えております。(拍手)

では、よろしくお願いします。

(座 長)

第 2 分科会の座長を務めさせていただきます、杉浦です。先ほど、事務局より自己紹介は省略と言われましたが、お手元の資料をご覧くださいますと、いろいろと事務局の方でお考えいただき、良いメンバーをそろえて頂いたと思います。

子どものキャリア教育といいますと、分断されているものではなく、継続して初めて一つのものになるものです。育ちのステージにある課題をそれぞれ把握されている方々にお集まり頂いておりますので、ぜひ忌憚のない議論をお願いします。

(副教育長)

それでは、以降の審議につきましては、座長、よろしくお願いします。

(座 長)

それでは、ご用意いただきました事項書に沿って進めていきたいと思っております。では、4 番の審議事項ということで、こちらの審議事項の案件は、1 点でございます。キャリア教育の充実に向けての具体的方策でございます。始めに事務局から資料の説明をお願いします。

(事務局)

※資料説明(「資料 2」を読み上げる)

(座 長)

ただいま、事務局から説明を頂きましたが、何か質問は無いでしょうか。現在取り組んでいる具体的方策の主なものについて説明がありました。資料としましては、総括表と個表という 2 つのものをご用意いただきましたが、さきほどご説明いただきましたように、総括表は、ビジョンとの関係及び

方策の概要について、一覧表にしてあります。個表は各取組の詳しい内容となっています。どちらに関する資料でも結構なので、質問はありませんか。

例えば、ビジョンや目標とかは、多くの皆様がビジョンを策定いただいておりますので、なじみのない言葉は少ないと思いますが、実際の取組状況のプロセスについては現場の方にしかわからないこともあるかと思えます。そういった点でも結構です。先ほどの全体会でもありましたけども、課題を出したりとか、その課題を乗り越えるためにはどうしたら良いかというような議論を進めていきたいと思えますので、まずは現状につきまして、みなさん同じレベルで把握をして頂きたいので、遠慮なくご質問頂きたいと思えます。

(向井委員)

キャリア教育というのは、われわれ経済界にとっては、一番、質の高い人材を生み出すという事で重要なことと捉えている。われわれの会社も学校教育に関わる中で、びっくりすることがある。18歳や20歳や22歳なりでの、子どもたちの人生の基礎づくりについて、あまり教育されていない。自分の夢をどうやろうかということを知らない人が意外と多い。そこを徹底的に考える訳です。三重県は大きなビジョンを作ったり施策を実施したりする立場。鈴鹿市でやるなら比較的やりやすい。例えば1校に絞って、経済界でここでモデルを作ろうとするなら、とことんやれるが、県全体では取組は難しい。まずは、モデル校を1校作って、それを経済界がバックアップするのはどうか。

わが社は、5、6年稲生高校の普通科（モータースポーツ）へ講師を派遣している。もうそろそろ引き上げても良いかと言ったら、びっくりしたのは、学校から自分たちの使っている教材は、ずれがあり古いという。学校ではかなり古い教材が使われており、最新型の情報に触れることに生徒たちの興味が強いので、ぜひ関わってほしいとのことであった。つまり、学校教育現場と経済界の変化には、ずれがあるのではないかと感じた。高校以上になると思うが、我々が関われる場所は非常に多いと思う。

さきほど言ったように、徹底的に高校1年生あたりから、例えば、あなたは将来何を目指すのですか、学校教育は基礎づくりの場、あなたに教育を押し付けるのではなく、あなたの夢を実現することをお手伝いするもの、という事をきちんと教えてあげる。より自分の夢の実現につながるのでは。

先ほど、就職先がよく変わると言われたが、そのことの何が悪いのかよくわからない。例えば自分は言葉が余り上手くないから英語を試してみたい、しかし駄目だった、違うところを志願するとか。営業が駄目なら違うところにトライする。自分も3か所も4か所も人生でいろいろと変わっていったが、それは全て自分のキャリアアップにつながっていった。そこに余りこだわらない方が良いのでは。それが、本人が選択できることを、早く見つけてあげることが経済界の役割だと思う。

たとえば、ある高校を決めて、ひとつのちゃんとしたキャリア教育として、あなたの夢は何か？社会人として活躍するという事について考えをまとめるなどのアンケートをして、経済界から何人か派遣して先生方と一緒にいくつかの取組を行うということもいくらでもできる。それを他に波及させていく。中部経済連合会でも、いくらでも人の派遣をすることができるのだが、実際はそれを使いたいという学校がなかなか現れないというのが現実の姿である。

そういう点で、三重大学のキャリア教育で、いろんな形をやり出して、全国から教師陣や様々な経済界の人が集まって来ている姿を見ると、大学というところはこういった事があるのだなと感じた。三重県の求めで、経済界がお手伝いさせていただくのは、高校で社会人になるところをバックアップさせてもらえれば、就職の受入も含め、我々が2年間なり3年間高校に行って社会人として通用できる人材を育てましよう、全部引き受ける事も可能で、そういうチームを作りたい。専門委員会

があったわけですから。それを三重県全体で広げるのは難しい。三重県でやるなら、まずは、経済界にキャリア教育の実験店舗をやらせてもらえたらと思います。私は、勝手ながらこういった事も経済界の役割かなと感じています。

(松岡委員)

最初に質問があります。③のインターンシップを体験する割合の目標が、平成27年度に35%以上になっているが、この数値が他の目標に比べると若干低い気がします。これは、どういった理由によるのでしょうか。

(座長)

事務局からお願いします。

(事務局)

平成23年度の現状が24.6%ということで、実際には卒業までに4分の1の生徒しか体験しない。ところが、学校としてインターンシップをしているのは、ほぼ100%。学校のシステムとして、特定の学科とか希望者のみとか一部の生徒の取組になっている。目標が低いということであるが、現状が低い数値なので、ご理解いただきたい。それと、一番の原因は、正直言いますと、インターンシップに対する教職員の意識かと思われます。

(松岡委員)

実は、今年私どもの会社で初めて高校生2名のインターンシップを受け入れました。生徒さんは非常に喜んで帰って頂きました。もっとこういった活動が活発になると、私どももその彼らが来年の採用に来てもらえると淡い期待を抱いているわけです。そういったことが充実していくといいなと考えています。

(副教育長)

どうやって、その2人は、社長さんところを知ったのでしょうか。

(松岡委員)

そういう制度があると知り、こちらが市の方に働きかけました。

(副教育長)

商工会議所でしたか。

(松岡委員)

商工会議所だったか。こちらから働きかけました。

(副教育長)

企業から働きかけて頂いたのですね。実際、学校がいくら希望しても、企業の方が受け入れてくれないといけないことになる。さきほどの説明にあったように、ウェブページで、企業の方は、インターンシップを受け入れても良いですよというサイトがありまして、この時期に、何名とかの情報を出してくれているが、それが中々周知できていない現状がある。それを見て学校は、この地域のこの職種なら受け入れてくれるなということを知る。実際問題、教職員も学校の教育活動の中で、いつインターンシップに出して良いのかわからないという意識の無さが一つと、企業側の受け皿がどこまで受けてくれるかが課題です。こんな時期なので、インターンシップが来ると、従業員1名張り付けないと危ないなど、手がかかるのでなかなか進まないのかなと聞いています。

(土肥委員)

高校の現状、言い訳を聞いて欲しい。まず基本として、高校の教育課程というのがありますよね。1週間で30コマを貼り付けている。月曜から金曜まで1限目から6限目まで、30コマ入っている。

その中は、英語、国語、数学など全て入っている。その中で、インターシップをやろうとすると、どこかのコマを割かないといけなくなる。平日に、例えば、私は、以前白山高校にいたのですが、1学年120人を地域の企業の方々をお願いするのは本当に大変だった。Aスーパーは1人やなあとか言われて、土下座するくらい頼んだ。120人の振り分けは、本当。しかも、時間をどこのコマに入れるかも難しい、そういうテクニク的なところが、一つの障害となっているのがまず1点です。

さきほど教員の意識が低いと言われたが、ちょっと反論したい。そんなことは無く、教員の意識は大変高い。今、子どもたちが抱えている課題、例えばコミュニケーション能力が低い、大人に敬語が使えない生徒がいることなどは十分認識しており、授業の中でも、どうやって解決していったらいいか考えている。私は、授業の中でもキャリア教育はできると考えている。例えば、数学でも一回立って、自分の意見を言いなさいと指示し、教員に対してだから、当然敬語を使って説明しなさいというのは、大きなキャリア教育だと思うし、そういうことを丁寧にはやっているんです。日本の社会構造と言ってしまうとそれまでだが、中々受け入れて頂ける社会構造にはなっていない。向井委員がさきほど言われたように、鈴鹿市という限定した地域ならできる、だけど全県ではねと、言われましたが、本当に言われる通りだと思います。そういう課題をどうクリアしていくかが、この場の大きな課題となってくると思います。まあ、学校での努力を知って欲しい。

それともう1点。三重県の高校一学年で13,000人くらいいる中で、その約65%が普通科です。三重県は特に職業高校の割合が高いから。専門高校であれば、企業に出かけていってお願いもしやすい、そういった科目もありますのでね、どんどん出していける。普通科の中でなかなかそういうのを採用するのは難しい。従って65%の学校は普通科なので、これから一生懸命工夫もしていかなければならないと考えている。みなさんの意見も聴きながら、一生懸命取り組みたいと思います。学校の現状と言いつつです。

(向井委員)

大事な事ですよ、我々もさっき言われて、ここで初めて知るので。窓口で人事が断っているのでしょうね。

(末松委員)

向井委員が言われるように、たぶん市で取り組むことは、そんなに難しくないと思います。私も市長になる前に、議員をしながらNPOの青少年育成活動の中で、インターンシップというもの、マッチングを7年間くらいやってきました。鈴鹿市内の全ての高校では無理ですが、ターゲットを絞って、この高校と、今年は10社の中小企業という感じで毎年毎年繰り返していく中で、最初は3日間、そして1週間という形で、そして夏休みを利用して取組をずっと続けてきました。

土肥先生が言われたようにマッチングすることが難しい。マッチングをする人は、企業に対しての知識も無いと難しい。それと子どもたちがどういう職業をこれから望んでいるかという意識付けについても、事前に教えてあげないといけない。その人材は、これから大事になってくるのでは。それを学校の現場の先生がやれというのは、今の状況の中では、少し難しいと思います。なので、さきほどの資料説明で、特別支援学校には外部人材が19名ということがありましたが、例えば、民間の退職された人事課の方が、キャリア教育のマッチングをするために働いてもらうなどということが、これからそういった人材が必要になってくると思います。

もう1点、企業さんは、受け入れてもらえないという印象を持たれているようですが、実はものすごく受け入れる体制は持って頂いている。ここにみえる向井委員、松岡委員のところもそうです。案外、今の中小企業は実は受け入れたいと考えているところがたくさんある。それを探せていないので

はないか。

どういう風な制度で、さきほどの2名の高校生がインターンシップに来られたのかと質問されていましたが、本来、それは、制度というか、先ほど言いました、マッチングできる人材がおれば、もっと容易にできることであって、その職業毎にもたくさんあると思うので、その課題というか、お互い受け入れたい、受け入れて貰いたいという真ん中を結びつける人材が特に普通科高校では少ないのではないかと、自分でやりながら思っていました。その人材を半分ボランティア、半分報償という形でもいいので、これからはもっとキャリア教育を進めていき、インターンシップでマッチングを推進していくことが重要になってくるのではないかと考えています。

また、配布された資料の課題で、「教職員が生徒の職場実習の実施に必ずしも積極的でない」とか、「割合不十分でない」とかの様な書かれ方が多いが、これは教育委員会としての意識の問題ではないか。それとキャリア教育推進地域連携会議の7箇所はどこですか。

(事務局)

北勢地区は桑名四日市で1箇所、鈴鹿亀山は鈴鹿地区で1箇所、津地域、松阪地域、南勢志摩で1つ、伊賀は上野名張で1つ、東紀州で尾鷲と熊野の商工会議所にお世話になっている。以上7箇所です。

(末松委員)

商工会議所さんが中心ですか？

(事務局)

あと市町の産業部門とハローワークに入って頂いてとか、地域によって異なります。

(副教育長)

言い訳する訳ではないですが、課題をですね、すぱっと出した方が良いのではないかと考えてこうしました。高校だけでなく、中学校もですね、いわゆる阪神大震災の時に、兵庫県が3日間のインターンシップを全部の中学生2年生に対してやり始めて、文科省がそれを全国的に展開した。予算のあるときは良いのだが、無くなると、やっているところとそうでないところと生じている。県的生活文化部の事業ですが、無くなっていくと、なかなか定着しないといいますか、中学校の段階でもやっているところとそうでないところが出てきている現状です。

そして、中学校のもう一つ上の高校では(インターンシップを)100%やっているということですが、なかなか上手くまわっていない。高校はそれを受けてどのようにやっているのか、その系統的・組織的にできているかと。中学生が3日間であれば、高校で同じ3日間ではたぶんだめだろうと。企業の方に言うと、3日間だと1日目お客様、2日目少しやって、3日目さよならで、良いとこ取りだと。5日間くらいあると、職業の厳しさを知ることができるのでは、と企業の方も文科省の方も5日間くらいやりましょうと提唱してくれていますが、さきほどからのように、教育課程の問題だとか言って、いろんな事を言ってできない理由を挙げるのです、学校は。教育委員会もそうかもしれません。市町教委も。そのできない理由をどうやって、できるようにすることが、チャレンジをなかなか提言できていないので、こうやったらできるのではという、こういった場で出来る提言を頂きたいために、これくらい書かないとなかなか提案をいただけないであろうと考えました。奥田委員さんも、何の資料と思われているかもしれませんが。

(座長)

説明頂いた総括表も多岐にわたっておりますし、議論も白熱するであろうということを想定して、説明頂いた総括表にあるものを、さらに効率的に議論してもらいやすいように、事務局で少しジャン

ルをまとめてもらっているので、まず説明頂いてから、後ほど詳しく御議論いただいて良いですか？
(副教育長)

柱立てということですね、4本の柱立てということで、やらせていただきたいと考えています。

※資料配付

総括表と個表を踏まえまして、今、お配りしました4つの観点でご意見をいただけたらと考えている。さきほど、末松委員からの就職支援の立場とか、組織的系統的キャリア教育であれば向井委員や土肥委員からのご意見、地域の視点からであれば向井委員といった感じで、いろいろなご意見が錯綜していましたが、4つの観点でご意見を頂き、会議を進めていただけたらと考えています。

(座長)

別紙で改めて配布頂いたものが、事務局から、この分科会を進めていくにあたりまして、4つに分けて頂いた柱になります。総括表の番号が飛び飛びになっているので、見て頂きにくいかもしれませんが、今一度ご確認頂いて、4つの柱で会議を進めて頂くということでご了解いただけますでしょうか。何か質問ありませんか。

まず、4つご提案いただいております、さきほどは、総括表3番、柱の3番の「地域と共に創る学校づくり」の視点からキャリア教育についてのご議論がたくさんありました。これについては、後半部分でお話ししたいと思いますが、まずは1番ですが、これが総括表と対応した番号が一番多いものですから、「教育活動全体を通じた組織的・系統的なキャリア教育の推進」ということで、総括表の番号では①②④⑥⑧⑨が該当している項目となります。この点について、まず始めにご議論いただきたいと思います。今、まさにインターシップについてお話し頂いていたところですが、分科会では、既に挙げられている課題に、その課題を改善していくにはどうしていったら良いかについてもご議論頂きたいし、あるいはここには載っていない課題など新たな課題についてご提案願います。

いずれにしても、よりビジョンが実行できるように、そして高校生にとって良いものになるよう、いろんな方面からのご指摘を頂きたいと思います。引き続き、先ほど同様、フリートークの形式でお願いします。

(向井委員)

1ですが、校長先生が言われた様に、われわれは、余り学校の内容を知らない。また、うちの社員を出してお役に立つというので、5年も6年もずっと人を出している。また学校の方も、経済界のことを余り知らない。そこに、アンマッチが生じている。初めて県の教育改革の会議に入らせて貰って、鈴鹿市は意外と進んでいるなど感じた。夢工房とか、先生の困り事相談とかなど、地域の経済人も含めて、そうやって先生としてやりやすい環境作っていくのが我々の役割である。

それと、企業というものは、どういう形を考えるかということ、ちょっと不況になると、子どもたちの駅伝など小さなスポーツ支援を全部カットしようとする。私はその工場に行って、こんな小さなものを、子どもらの夢を削らないでくださいと、元へ戻してくださいとお願いして、全て戻してくれました。グローバルで締めろと言われると、現場の人らは全部締めるのです。地域から声を出すと全く違うのです。という形がありますから、そういう点で、学校教育は、ぼくらの経済界にとって、質の高い子がおれば、いくらでも採りたい、我々の成長を止めているのは、「人」なんです。協力をするとはやぶさかでないけど、三重県全体と言われても、三重県が、教育長から経済界で支援チームなどを作ってくれと言われてたら、人を集めて作る。しかし、ここが不足していると言われても、こっちから出張って行ってなんかをしようかというような経済界は意外と少ないと思います。要請があればお手伝いする、人・モノ・金を出すよという形ですが、こういう感じでお願いしたい。勝手なこと言っ

て申し訳無いですが。

たまたま東日本大震災で、我々は車屋でありながら、仮設住宅を作っています。その道中に車が必要になると。鈴木知事から、車を供給してくださいと要請がありましたので、現場へ見に行き、三重県の販売店でやりますという感じで、具体的に要請を受けたら必ずやります。

しかし、これは抽象的だから、なかなか難しい。だって校長先生は、我々がただ単に行ったら、邪魔なんですよ。もちろん困っているのであれば、お手伝いします。ロットがあれやこれやなんて言ったら、余計なやつらが来て、勝手な事を言っていると、なってしまう。我々は学校の教育システムを全部拒否するものではない、すばらしいモノであると評価しています。極端なことを言えば、我々はどんな不況でもある高校から事務員を必ず採ってくれ言われたら、毎年、絶対採らなくてはいけないと思ってやります。企業は出来ることはバックアップしますが、総括的にやれ言われたら、難しい。相手もウィンウィンでないとやりにくい。三重県がビジョンを出した時はすばらしいと思いました。でも、具体的になると、こういうことを認識して、我々が地域でやれと言われたらやりますが、難しいと思う。

(土肥委員)

1番についてこういった形を出していただいておりますが、現場の私の希望として、ここで言わせていただきたい。場面場面を想定して行って、皆さんの知恵が欲しいだろうと思う。学校教育の中で、さっき言ったように授業が週30コマある。その他の部分としては、ロングホームルーム、総合的な学習時間もある。一歩学校を離れてみると、土日、長期休暇の中では、地域とつながる場面がある。場面場面でこういったキャリア教育をやっていたらいいのかを教えてくださいというのが本音である。

例えば、授業の中で、どうやってキャリア教育を取り入れたらいいのかわからないんです。それを教えていただけると嬉しい。また、ロングホームルームや総合的な学習時間であれば、若干時間がまとまるのであれば、外へでるとか、逆に来て頂く事はできるでしょう。また、長期休業中であれば、インターンシップに普通科高校の生徒は行ける、専門学科であれば、長期休暇を利用しなくても授業の中でも行けるかもしれません。そういった場面場面をきちっと設定していかないと議論が散漫になる気がします。授業の中でどんなキャリア教育があり得るかを教えていただきたい。休みの時には、どんな地域の協力があるのかを教えてください。そういう流れで話して頂ければ、現場の教師は意識が低いかもしれませんが、徐々にわかっていくのではないのでしょうか。

(奥田委員)

私は職業高校にいるので、副教育長はさきほど私がどう思うかと言われましたが。現実に教職員の中に、例えば普通科とかそういうところを中心に、課題に挙がっているような意識は確かにあると思う。うちの高校で見ていると、確かにそうだろうなと思います。キャリア教育を議論する時に、うちみたいに専門に特化した学科の、いわゆる総括表の4番の職業教育と小中からずっと系統立ててきて、高校までずっとキャリアというものを身につけさせながらやっていくキャリア教育が、一緒の中で議論されるのは違和感がある。土肥委員が言われたように、場面場面と言われたのは、なんて言うか、例えば、うちの普通科の子らだったら、本当に小学校の頃から、こういうものになりたいとか系統立てた教育を受け、高校でも何になるのかなわからないまま入学してきた子が、その続きの中でやっていく、そういうキャリア教育はすごく必要である。その子たちに対して、例えば食物調理科であれば、今年も県農水商工部のご協力の中で、私たちが生徒をインターンシップにやりたいような県外の所へ経済的にもバックアップしてもらって行けるようなキャリア教育をすることができ、専門高校の生徒だと、そこへは長期に行く事になるので、その職場が(生徒を)採ろうと思ってキャリア教育してく

れる。そういう所に高校生であっても入り込めていけるのは、県や企業の協力であったからである。大半の普通科の生徒たちは、そういった事は無理じゃないですか。なので、うちのキャリア教育として、多気地域の中で推進していくときに、すごく、職業学科の場合は、一つになってキャリア教育はこういう方向でと打ち出せたのですが、なかなか普通科とは一緒にはできないということで、非常にもどかしい。

それともう1つは、系統立てたキャリア教育をしていくときに、地域の小学校中学校に、例えば職業高校の高校生なら、働くことは楽しいのだよと、逆に自分たちがインターンシップを受けて学ぶ側であるにも関わらず、教える側に回れるという、ものすごい強みもあったりする。それは普通科の子には無理なことである。という風に、うちの学校は普通科と専門学科が一緒にあるので、すごくごちない。だから、専門学科にいる人間は、あれもこれも生徒に体験させたいと、夢が膨らんでくるから、ここに書いてある課題、教職員の意識と言われると、えーっとか思うのですが。でも、普通科の先生方はどうかというと、やっぱり大学へ入れるという進学志向でないですか。大学へ入れることが、土肥先生が週30時間の中で授業を一杯しなくてはいけないんだよと言われたように、結局キャリア教育を受け入れる余裕が教員に無い。教職員に意識がないのでは無くってということ。で、うちの高校でもキャリア教育委員会をたてて、何かやろうかとした時に、普通教科の先生らは、そんな事よりも英語の時間を充実して、何時間もやった方が良いのではとなる。目の前の大学に入れなくてはならないという意識、きつとまじめなのだと思うが、そういう意識の方が強い。だから高校生を十把一絡げにして議論していくと、すごく違和感を感じます。できたら、大多数の普通科の子たちの、小中高からずっと系統立てたキャリア教育について、県として考えていく。いわゆる4番の職業教育のあたりでは、もっと企業、行政とタイアップして、もっと就職先を県外国外に開拓するような施策があるのではないかと、そんな風に思います。上手く言えないですが、①②④⑥⑧⑨が一緒に、しかも特別支援学校のキャリア教育はまた違うのだろうと思うが、それが一緒に議論されるという所に、すごく違和感がある。

(座長)

ありがとうございます。こういうご指摘をいただいた訳なんですけど、この柱の中で提案頂いた内容に沿って分けて考えいくということも可能なのだと思いますが。私自身も座長として意見をまとめるという意味では無く、一委員として発言させていただきますと、この中で、発達段階に応じてという言葉もあるのですが、これはいかようにも読み替えられると思うのですね。子どもの発達段階とは、小学校、中学校、高校といったステージがあるのかもしれませんが、既に職業意識があって専門的な職業校に入っている学生と、何をしたいかわからないからとりあえず普通科に行って、そのまま高校を卒業して社会に出て行く生徒に対する高校での職業訓練と、後は大学に入ってから社会に出ていくという段階では、また全然違ってくると思います。私の場合は短大なので、すぐ社会に出ていく目前のゴールがわかっているのですよね。短大の中へ入ってきてくれるまでには、最低ここまでは身につけておいてもらいたいけれども、その後のキャリア教育に関しては任せてねという部分があたりする訳なんですよね。なので、その辺はやはり曖昧にしないというか、ぼかさないためには、そういう意味での発達段階に応じたキャリア教育の進め方についての議論もしていく必要があるではないかと思えます。

ですので、そのあたりについては、皆さんから出して頂いた議論に関しては、また事務局と相談して分別をして体系立てていきたいと考えますので、全体的なところからのご議論をいただければと思います。

(向井委員)

何度も言うようだが、先ほど奥田先生も言われたように、志を持って先生のところ(=相可高校)に入られる方は、(支援は)必要がないと思う。高校で全く目標なしに、社会に出て行き、そして現実とのギャップがあった。ここをどう支援していくかということが、やはり大事だと我々は思っている。普通科は5割の方が社会に出て行くというんだったら、この5割の先生は、校長先生に申し訳ないけど、我々の企業でそれを引き受けて2年間やらせてもらえれば、社会で通用するようにし、就職率がものすごく高くなるということは可能です。会社というのは新入社員が入ったら6ヶ月にわたって、カリキュラムを組んで教育している。我々が教えていることを組んでみたら意外と変わってくる。何の目標もないのにやっても難しい。ホンダ学園という学校は、100%就職がある。親も「あのホンダ学園に入れば100%入る」と考えます。ただ先ほど言ったように、ものすごく学費が高く、全寮制であり、ほとんどアルバイトができないというと、限られた人しか行けないのも事実である。現実にF1の世界とか、メカニックはホンダ学園出身の人が全部行っている。メカニックになりたいんだなどと、目標がはっきりしている人には、(我々の支援は)あんまり役に立たないのではないかと思う。おそらくそういう学校に行って経済界と連合を組んでやれば、就職率も滅茶苦茶高くなるし、高校生で卒業する人たちのスキルも上がる。高校生は現場からスタートするしかない。現場から覚えたキャリアを積んでいくことによって、何も恐れることはない、ここを我慢しなさいと教えてやれば、その間に2年間なり、修行に1週間に一回でも行かしてもらえれば変わってくる。我々は社員に教育しているカリキュラムは全部持っているので、それを高校生用に全部変えるということは可能です。

(座長)

今、奥田先生のところ(=相可高校)に入ってこられる学生さんは、キャリア教育が必要ないのではないかという話がありました。

(奥田委員)

そういうキャリア教育もあれば、本当にあまり目的もなく、ただ高校に入ることだけ、特に松阪高校だったら、大学に入ることだけをしているキャリア教育もあります。特に日本はそうで、目の進学のことだけを考えている子たちへのキャリア教育とは、根本的に違うのではないのでしょうか。本当の根本は同じかも知れませんが。

(副教育長)

高校の話が中心になっていますが、普通科では7500人が学んでおり、就職する生徒は1100人います。三重県で就職する生徒はだいたい4000人くらいです。一番問題なのはこの1100人の普通科の就職者です。土肥校長が言われたように、専門教育を受けると、工業高校から製造業に就くように、学んだことと就職がある程度直結しています。農業学科だとそのようにはいかないが、普通科が一番困っているんです。進学する子どもたちはまだいいにしても、1100人の就職する生徒をどのようにキャリア教育していくかということなんです。進学でも工学部で機械を学びたいのか電気を学びたいのかや、何をやりたいのかということが大学のオープンキャンパスや研究室訪問を通じてわかったり、これは自分のやりたいことと違うなということがわかればいいんですが、普通科の就職の子どもたちには勤労観や職業観をどのようにつけるかということ(は課題)です。英語や数学(などの教科)が30時間入っている中でどのようにすればいいのか、キャリア教育を授業に取り入れるにはどうしたらよいかということ企業の人に聞いても多分返ってこないと思います。先ほど向井委員が言われたように、企業・地域へのオーダーは具体的にということが大切なことだと最近思ってきました。私も部下の職員に「これをしてくれ」といいますが、それではだめで、「このようなこと

をこのような資料に作ってくれ」と指示は具体的にしないと、(部下は)反応がしにくいので、そのあたりを最近考えています。高校、特に普通科の先生方はキャリア教育に取り組まなければならないとまず思ってもらうことです。その次はキャリア教育に取り組まなくてはならないけれども、どのような座学で取り組んだらいいのかとか、会社に出て行ったときにどのようなことを企業の人に子どもたちが教えてもらったらいいいのかということ具体的を持っていなければ、企業の人も、来てもらったが何を教えるのかということになります。どのような観点で子どもたちがお世話になるのかということのオーダーを出さなければならないと思います。今日、一つの気づきを得たのは、学校から企業に出向くときには、指示なり養成支援を企業に具体的にする必要はないかということです。長期休業の時などに企業に受けていただくときは、お互いが具体化しながらやっていかないとなかなか難しい。企業の方に学校の普通科の授業や専門高校の授業の形態を教えても絶対無理であり、(企業として)これならできるので、ここでこういうことをしてくださいということを企業の方にお願ひするということなのかと思います。

(向井委員)

私たちはお客様に愛される企業づくりをしており、それは学校教育も同じです。そこをマッチングしなければならぬと思う。我々は経営品質をやっているが、我々が高校の先生に言いたいのは一週間に2回はきちんと休んで、その2日間に目的があるかということです。家族に奉仕するなど、休日をきちんと使えば、5日間は全力で働ける。企業はあなたは休みから想定しなさいということ徹底して教えます。企業は長いから。8時間にどれだけ密度の高いことができるかでどんどん変わっていくと思う。企業は人間の生きる社会にゆとりを持って幅広くとりくんでいくということ徹底して教える。あなたはこの学校教育を通して、社会でどんな人になっていくのか、先生は一生懸命あなたに教えてくださっている、だからそこをやってほしいということ我々が言ったら違うと思う。うちの会社はこういう会社だからあなたを未来に引き受けたい、だからマンツーマンでやれませんかとも言える。これを学校教育で全部やれというのは無理だと思う。

(末松委員)

具体的に求めていかなければならないのは普通科の部分だと思ひます。鈴鹿市の場合、小学校と中学校は連携をしています。小学校でこのようなキャリア教育をして、中学校では自分たちが職場に出るようになったらどのようなことをしたいか、小学校の段階でいろいろアンケートをとったりもしました。中学校で実際に現場に出るときには、神戸小学校と神戸中学校に神戸高校も入ってもらって、神戸地域の中でキャリア教育を考えましょうということになってきました。今までは小学校と中学校は連携していましたが、高校段階で切れてしまう状況でした。小学校と中学校でやって、地元の高校に行ってもらえばいいんですが、たとえば津や伊勢の高校に行くと、そこで切れてしまいます。また、普通科の高校との連携について、どういう形で小学校・中学校と連携できるかということが課題です。その連携をうまくとっていくということは不可能ではないと思ひますが、相可高校など専門的な教育をしている学校はキャリア教育が必要ないような気がします。

(座長)

普通科と専門学科という話がありますが、共通して必要なキャリア教育が必ずあると思ひます。離職率の話もありましたが、普通科と専門学科を選んだ学生でキャリア教育の発展段階でどこが違うかということ、なりたい職業を見つけられるかということ、それに対する知識を習得できたかどうかの差だけだと思ひます。相可高校の食物調理科は有名ですが、調理師になったとしても離職してしまつたら同じです。インターンシップに行ったとしても、目的も調理師の技術的なインターンシップで

はありません。キャリア教育の基本理念にもありますが、働くことのたいへんさや職業観の育成に関しては、高校生なので普通科・専門学科に関係なくやっていく必要があるのかなと思います。先ほどの話では、三重県内で普通科を卒業してすぐ就職する学生が1100人ほどいるということでした。その1100人の人たちに対して、先ほど言った共通のキャリア教育に加えて、どんな職業に就きたいのかということが2段階で要するという考え方をしていたほうがいいのではないかと思います。

(太田委員)

小中学校のPTAの代表としての観点から考えていました。私の子どもがお世話になった小学校の卒業式の時のことですが、(卒業生は)校長先生から卒業証書もらったあとに30秒から1分くらい宣言をするという設定になっていました。(宣言には)3つくらいのパターンがあり、両親に対する感謝の言葉を述べる子、中学校に行ったらどのようなことを頑張るかを述べる子、そして将来自分がどんな職業に就くかを明確に述べる子がいました。将来自分がどのようになるかを述べる3つ目のパターンが結構多かったように思います。それに親たちは感動していました。私も自分の子どもがまさか政治家になると言うなんて思ってもいなかったので、エッと声に出してしまいました。息子の友だちは、将来弁護士になって、このような事件があればこのような弁護を行うということを具体的に述べていました。女の子で最も多かったのは、パティシエでしたが、まだ12歳の子どもたちがこうなりたいと思っているのを聞いて、父親も母親も本当に泣いてしまうということがあったのを鮮明に覚えています。これが一番はじめのキャリア教育なのかと思います。変わっていてもいいと思いますが、将来、何になりたいかということをおぼろげながらも無理矢理でもいいので、小学校の段階からとにかく考えてみるということだと思います。八百屋さんの子どもであれば、父親が一生懸命働いていて、それなりに生活できて、地域の人に喜んでいただいているので躊躇なく「八百屋」ということもあると思います。保護者が大工さんであれば「大工さん」であるかも知れないし、魚屋さんであれば「魚屋さん」かも知れません。それでいいと思います。よく保護者の皆さんは、「自分の職業は自分が苦勞しているので子どもには. . . 」と言いますが、子どもが選ぶのですから、そのようにしたらいいと思います。発達段階に応じてということがあり、中学校では中学校のインターンシップで、ラーメン屋さんやガソリンスタンドで働かせてもらってということをしていました。働くことがたいへんなことを理解して帰ってきていましたが、それで将来自分が何になるということはあまり受け取っていません。働くことがたいへんだということだけは、友だちも含めてみんなが思っていました。息子は今は高校生となり、たまたま進学校に行っているが、普通科の中でその子どもたちに向けてどのような教育をするかということが一つのポイントだと私は思います。小学校や中学校段階でおぼろげながらも、このようなものになりたいというものがなかったならば、多分高校になってからやろうとしても、難しいと思います。やはり、小学校、中学校くらいで少なくともこんなことをしてみたいとか、あんな風になりたいということができていたら、高校で教えやすいし、リードしやすいと思います。それぞれの段階で教育は必要だろうと思います。高校生くらいになると何になりたいかを逆に決めるににくいと思います。情報がありすぎるし、情報を得られるために、なかなか決められない。答えになっていないかも知れないが、これから普通科においては、世の中にいろいろな職業があって、この地域で生きるのであればどのような仕事があるということを見せながら、その中でインターンシップのあり方などが具体的にになっていくと思います。今はインターンシップと言っても、とにかく受け入れるだけであり、その子の将来のことまで考えて受け入れているかといわれるとちょっと自信がありません。高校の先生たちと、子どもたちと、そして企業側が一緒になって、どんなことを目標・目的としてインターンシップをやるのかということを作り上げなければならない

と思います。今の場合だと（インターンシップに）とにかく出さなきゃ行けない、受け入れなきゃいけない、そのマッチングがされていないというのが一番ポイントだと思うので、商工会議所などがもっと活発にコーディネーター役を引き受けなければいけないと思うし、そのようなことを期待したいと思います。難しい問題かも知れないが、私の思いとしては小中学校でカリキュラムとしてこのような段階までは子どもたちに考えさせてみるということは県全体で取り組めるのではないかと思います。

（座長）

非常に論点も多いですが、もう少しこの議論を続けます。普通科を卒業して、就職する学生に対するキャリア教育の重要性ということを皆さん認識しているようなので、この点についてももう少し議論を深めたいと思います。実際に県内の普通科の高校でも、一日体験入学や一日職業体験のようなことをしていると思いますが、普通科で進学する学生にとっては、どの学部に進学するかによって就職先も随分変わってくると思うので、就職する1100人を対象にした普通科の高校で、様々な職業の中で自分の職業を選ぶのに直結している取組や、かつ成果を上げているような県内の事例があれば紹介していただけたらと思います。

（事務局）

四日市市にある朝明高校は普通科で就職する生徒が6～7割いますが、2年生のうちからいろいろな仕事にふれるために、企業の方に来ていただいて仕事にふれる体験をしています。また、自信のない生徒がたくさんいるので、自信をつけるようなグループワークの活動も行っています。それらのことを取り入れながら、2年生でインターンシップを5日間しているという事例もあります。

（副教育長）

先ほどの普通科で就職する生徒1100人の内訳で製造業が416人、次に医療・福祉で132人、そのほか、卸・小売が100人くらい、運輸・郵便が70人くらいという状況です。次回資料を出させていただくので、いろいろなデータを示しながらどのあたりに課題があるのかを考えていただきたい。

（座長）

圧倒的に製造業が多いですね。

（奥田委員）

朝明高校の場合、自分が体験した職種、つまりすごくインターンシップがよかったから、そこに就職すると決めた生徒の割合はどれくらいですか。

（事務局）

割合としてはつかんでいませんが、必ずしもそうはなっていません。

（奥田委員）

普通科の生徒たちを見ていると、職業については、先ほど情報がありすぎてという意見がありましたが、本当にそうだろうかと思うところがあります。知らない職業が、特に田舎に行けばいくほどあり、（土肥委員が）白山高校ですごく苦勞されたというのは地域に会社がないという要因もあると思います。どんな職業があって、どんな会社があって、どんな仕事があるということを、高校生がどれだけ理解できているかと思うと、都市部の生徒は見聞きもするでしょう。朝明高校の取組で、働くことを身につけ、働くことがすごく大事であるという意識は持てているが、それだけでは小学校・中学校と目的が一緒になってしまいます。企業の方に普通科の生徒にしていきたいこととして、いろんな職種のいろんな人たちが話にきているだけでもありがたいと思います。高校も中学校に高校の内

容について説明に行くが、知ってそれについて関心を持ってほしいということがあります。同じように相可高校や白山高校のような少し不便なところにも県内にこんな会社があるということを話に来てくれる事業を立ち上げてもらってもすごく大きいかなと思います。高校生が行くインターンシップであれば、いろんな職種を知って一年生の時に勉強して、2年生で自分が興味があったところにインターンシップに行くのなら本当にいいと思う。それが思ったところと違うからやめたというのとかまわらないと思う。相可高校ではパティシエのコースが非常に人気が高くなったことがあります。テレビの影響があり、ちょっとブームになれば飛びつくが、そうではなく埋もれている職種について子どもたちに教えるのもキャリア教育の取組の一つかと思います。かつてNHKの教育で職業を取り上げた番組にたいへんよいものがあり、生徒たちに見せたことがありました。調理師やパティシエになりたいといっても、生徒たちは食に関する職業にはどのようなものがあるか知らないし、専門学校が出している食に関する職業の資料を見て生徒たちはびっくりすることがあり、そのようなものを与えられる教育が出てきたらと思っています。

(座長)

実際に短期大学の学生であっても、いろいろな業種について知らないことがあります。業種も個別の企業のことも知らないことが多く、業種や職種を熟知していないと、こんなはずではなかったということで離職につながっているのではないかと思います。

(土肥委員)

今は「ようこそ先輩」のような事業をかなりの学校でやっています。本校では1年生の320人を16に分けて、OBの弁護士や医者や製造業の方から話を聞く。そのような取組をかなりの学校が始めています。確かに効果はあるが、薄まってしまう部分があります。1年生で実施し、2年生で勉強に追い込まれ、3年生で受験勉強に更に追い込まれる中で、そのような職業のことは関係なく、大学の名前だけで必死になってしまう。今現在も夏休み中だが課外授業が行われています。5週間で5期の課外授業を行っており、夏休みもあったものではない。そんな中で「ようこそ先輩」をやっても、継続という中で薄まってしまっている。だから本当にカリキュラムの中にきちんと位置づけていかないと、キャリア教育はできていかないと思います。

(座長)

松阪高校ではほとんどの生徒が進学であり、卒業を目の前に控えていない学生に対するキャリア教育がそれである必要がないのかもしれませんが。先ほど全体会の時に向井副会長の立場からなかなか自分の会社が求めるレベルの学生が来てくれない、それが企業の成長を止めているという話がありましたが、それは別の分科会の「学力の向上」につながってくるのかも知れません。ある程度、進学を見据えた学生に対する高校段階でのキャリア教育で、学部・学科さえ間違えなければ、大学で相可高校がされているようなキャリア教育を受けていくなど、高校ごとに描くべきビジョンは違ってくると思います。

(土肥委員)

キャリア教育として「未来設計ガイダンス」という名前をつけています。1年生の今の時期には「職業を知る」、1年生の学年末には「大学に行った先輩の話を聞く」、「学部の理解をする」、2年生では夏休みに大学へ行く、つまりそれぞれ自分の行きたい大学を自分の力で見てくるという大学訪問をさせる。2年生の学年末にはもう一度大学に行った先輩の話を聞く。まず第一に、最初の段階で「職業を知る」というのは非常に大きなことなのだと思います。それでも子どもたちは身につまされないというか、現実感がない。職業を知っても、例えば弁護士の話を聞いても、自分は弁護士になりたい

と思っている生徒はいるかも知れないが、法学部に行くだけの力がないのでだめだとあきらめる感じ
です。別に職業に貴賤はなくて、何になりたいといっても、我々全員が好きな職業に就いたかとい
とそんなわけではない。生きていくことの意義などがバックボーンに流れていて、それに加えて自分
がやりたいものになればそれでいい。バックボーンのところを小・中・高を通して教えていくのが
本来のキャリア教育だと思っています。

(副教育長)

松阪高校の取組を聞いているとどうも受け身です。大学の研究室なり学部に行っても職業は見て
こない。弁護士であれば弁護士事務所に一週間行くとか、子どもたちが主体的にアプローチする経験
が必要で、耳学問や本で読んだというキャリア教育でいいのかなという気がしています。職業を知る
ということには、現場に行くことが必要で、例えばトヨタでもホンダでも研究所に行くのでも意味が
あると思います。研究所であればいかに整理整頓ができていてきちんとされているとか、工場に行っ
たら油臭いにおいがするとか、いろいろなシチュエーションがあり、そこに会社なり工場のおいが
あると思います。進学する生徒についても、私はそのにおいを嗅いでくることが大切だと思う。大学
の話や「ようこそ先輩」での話をきいても、それが職業観につながっていくかということが、今の大
学生の就職のところでもつまづいていると思う。それはやはり、小・中・高と系統的なキャリア教育
がなされていなかったのではないのか。大学でも、とどのつまりになってどうするかということにな
っています。私も必ずしも教員になりたいと思ってなったわけではなく、教員になったと思えば30
年間教育を離れてしまって、こんなことなら最初から公務員になったらよかったなど、何が人生かわ
かりませんが、とにかく職場のおいは嗅がさなければならぬかなという気はしています。高校で
卒業する子はいくらでも、大学に行ったら次に職業につなげていかないと意味はないと思います。
そこは高校ももう少し頑張らなければならぬところだという気がしています。

(太田委員)

一番大切なのはその子どもが「心に火がつく」かどうかだと思います。自分が成長していく体験で
もそうだったが、人間というのは本当にしなければいけないとか、やりたいときに本来の力がぐっと
発揮されて、力強く生きていけると思います。ところが今の子どもたちは、先ほど土肥委員が言われ
たように「身につまされて」いません。宙ぶらりんで、しかし何もしなくても生きられるし、普通に
生活もできるし、苦しまないというところでずっといられる。なかなか心に「火がつかない」状態
で、そういう子どもたちは多いのかなと思います。先日の高校野球で伊勢工業高校は敗退しましたが、燃
えるものを持っている子どもたちはいいと思いますが、燃えるものを持っている子どもたちの方が圧
倒的に少なくてなかなか燃えられないという状況があるんだろうと思います。そのような意味におい
て、小中学校の頃から教育の場において情報は提供するが、先生方にもお願いしたいし、企業側もや
らなきゃいけないと思うのは、その子どもたちの心にかにしたら燃えるようなともしびをつけてあ
げることができるのか、またそのようなお手伝いができるのかというところが、一番ポイントなの
ではないか。それが今、山口副教育長が言われた「におい」なのではないかと思います。座学ではなく、
知識を得るのでもなく、その場がすごく好きになって、何かの実感を得られて、これになりたいん
だというものを得られるような、何か子どもの心に火をつけられるようなものがあると思います。保護
者の立場も同じで、その子どもがどんなふうになっていってもらいたいかということ、やはり自分の好
きな仕事に就くことができるのが一番いいと思いますが、最終的にその人が本当に一生懸命やるこ
とができれば、よろこびはそこに必ずあると思うので、抽象的な言い方になったが、そのような観
点を議論に加えていただければありがたいと思います。

(座 長)

議論を少し広げて、全ての項目についてどの切り口からでもよいので、気づいたところや、実際の教育の現場でどのようにすすめているのかなどについて、質問等もしていただければと思います。

(松岡委員)

私のところは建設機械のレンタルをやっていますが、建設機械の整備を目指す学生を採りたいと思って工業高校に募集を出してもなかなか応募がありません。今回インターンシップをやってみようかということになったのは、そういうところから生徒が来てくれて採用につながればいいと思ったからです。生徒がどのような職業があるのか知らないという意見がありましたが、私たち企業側としてもこのような職業があるということを生徒たちに説明する場というもの、今はありません。大学生向けであれば、会社説明会という場が結構たくさんありますが、実際に中学・高校の生徒向けというところあまりないように思います。そういう場を作っていく、そこでのお互いのニーズがマッチするような場ができていくのではないかと思います。

(座 長)

そうと思いますが、実際にそれは可能でしょうか。高校ごとに卒業生の就職先は地域性もあり、ある程度、地元企業とのつながりなどもあるので、その地域の会社に体育館等でブースを設けていただいて学生が興味のあるところを何社か巡っていくことや、場合によっては1年生、2年生、3年生の夏休みに違う会社でインターンシップを試みるなどを高校の中でするのは不可能でしょうか。

(副教育長)

朝明高校や白子高校はやっていますが、全部の高校ではありません。

(座 長)

高校であれば一校に対して何社くらいの事業所が募集するんですか。

(副教育長)

次回には資料を出させていただきますが、まだ新しい取組ではありますが、朝明高校では1・2年生対象に企業から来てもらっています。これまでは商工会議所がハローワークと連携して就職説明会を地域ごとに実施していただいていた。高校もそこへ進路担当の教員や生徒が出かけて行っていました。また、新しいパターンとしては津市では産業支援課が県教委や商工会議所と連携しています。一つの高校が体育館に20～30社の企業を呼んでということはありません。高校が生徒を送り出した企業とは連絡をとることはありますが、高校が丸ごと地域の企業を呼んでということはないので、それも一つのいい提案かなと思います。

(座 長)

そういう機会があれば、今まで採用がなかった企業もそこに入っていくなどが可能となりますね。

(末松委員)

県立高校と県教委、そして企業との間に行政が抜けていると思います。もっと市町を利用したらどうでしょうか。地元の企業を呼ぼうと思うとき、一番よくわかっているのは地元の市役所です。市役所の人々は観光にしても、民間の人たちと接しているので情報を全て持っています。しかし、高校や教育委員会だけで完結してしまって、その真ん中の行政が抜けているので、そこでの話をもっと発信していただければいいのではないのでしょうか。最初に向井委員が言われたように、鈴鹿では教育委員会と連携を密にとってやっていますので、コミュニティースクールも40校全てで実現できています。話を聞いているとそれほど難しいことなのかなあと感じてしまいます。

(松岡委員)

私たちがなかなか思う人材が採れない場合は、採れないので何とかしてくださいという駆け込み寺のようなところが本当はあるといいし、その役割を行政の方々が果たしていただけると非常によい。
(副教育長)

ハローワークに出しても新卒者はなかなか来ない。学校の求人票を見ながら子どもたちは行くので、なかなか売り込むチャンスがないんです。

(松岡委員)

建設機械のレンタルといってもあまり知られていません。

(座長)

機械の整備を求人しているということでありましたが、普通高校を卒業した学生でもいいんですか。

(松岡委員)

機械に興味がある学生であれば全くかまいません。

(座長)

そのような情報発信を具体的にしていただけると、普通科の高校としては非常にありがたい。機械だと機械科の学生でなければだめということもあり得ると思います。合同会社説明会のような場も、一回きりにするのではなく、そこに参加していただいた企業の採用担当者の方と、教員や行政も入って定期的に連絡会的な場があると、「課題」となっている、「企業が求めている人材育成に必ずしも対応できていない」ということも解決できるのではないかと思います。

(奥田委員)

市や町の行政の方が入ってくださるとするのはたいへん大きいと思います。学校も積極的に生徒を見てほしいという部分があり、例えば相可高校では文化祭の1日を公開にして関係企業にも来てもらえるように案内状を送っています。案内状を学校側が発信したときに企業側に興味を持ってもらえるか。その中で企業側もあの高校では生徒たちがどのような学校生活を送っているかということが、求人活動にも役立つか。高校も自ら行動を起こさなければならないので、自分たちの育てた生徒や学校の生の姿を見てほしいし、自信を持って売り込みに行かなければならないのかと思います。ただ、こんな文化祭なら見てもらわない方がいいというマイナス的な思考の時もあるだろうし、学校はいろんな問題を抱えているので文化祭等を非公開にする動きは強いが、それではいけないんだろうと思う。公開したら公開したで、問題もいろいろあるが、公開したら企業の方は見に行ってみようということで見に来ていただけるものなんではないでしょうか。

(向井委員)

例えば文化祭のプログラムを作るときに企業にスポンサーになってもらって、金銭面でもある程度協力してもらおうということになれば、必ず行くと思います。お金を出したり、コストをかけると、企業というものは行動しようとする。招待をもらってもお金が介在しないと意外と垣根ができてしまうが、パンフレットに協賛してもらおうと豊かで大きな文化祭ができるし、その文化祭を見てもらって、採用に結びつけることもできるのではないのでしょうか。企業はコストやお金の流れを必ず見えています。企業側も年間どれだけのコストを社会的貢献に使うということを言っているのです。その場合のイベントには誰かは行っています。

(奥田委員)

(企業側への招待を) 忙しいので申し訳ないかなという気持ちで出しています。来ていただくと単純にすごくうれしいけど、そのようなことも各学校は計画しなければならない。吹奏楽の発表会はそ

のようなことをこまめにしているが、学校もそのような努力をしていかなければならない。

(末松委員)

学校側もそれほど遠慮することはないと思います。

(松岡委員)

世の中、中小企業が多いので、そのあたりの企業の意識も変えていく必要があると思います。

(末松委員)

地域の学校に招待していただけるということであれば、中小企業の皆さんも地域に認められているという誇りにつながると思います。やはり地域貢献をしているからこそ、この学校に招待されているんだという意識を持っていただいているはずなので、どんどんアプローチしていただいているのではないかなと思います。

(向井委員)

本社の社長は（招待を受けた）卒業式等に全て出席しています。学校から呼ばれたら全てお手伝いしようと考えています。今年も男性の高校生はほとんどNOであるが、学校から採ってくださいといわれて2人採用しています。例えば、商業科を出ている生徒だったら、学校から何人採ってくれと言われれば、不況であろうと採り続ける。お世話になったらずっと貢献していきたい、企業というのはそのようなものです。遠慮せずに窓口を開けるかどうかである。企業というのはサラリーマンの社会なので、自分の職種にガードを張るが、そのガードを破るのは例えば学校の先生から文化祭をやるのでスポンサーになってもらえませんかということであり、お金を出せばその担当の者は行く。就職の担当の先生からインターンシップをお願いされたり、毎年一人採ってほしいと頼まれたりすると絶対採る。そのようにして「繋がる」ということが非常に大事だと思っている。

(末松委員)

特別支援学校では、かなり熱心に、活発に企業の皆さんのところにも足を運んでいます。特に特別支援の子どもたちはこれから自立をさせるためにどのような職種がいいのかということのを常に一生懸命考えて、何度となく足を運んでいただいています。市役所の方からつきあいがあるのだから、ここここは声をかけて置いてもらえませんかというくらいまでお願いされています。企業を退職された人事を担当された方々は押しがきくので、必ず就職に結びつけていく、そのような人材がこれから普通の学校で有効になっていくのではないのでしょうか。

(向井委員)

私は県がまさか現場でここまでキャリア教育をしてほしいとは思っていなかった。市でやるといわれれば、どんなお手伝いもするが、県全体という県はビジョンだけしてもらえれば、地域ではやる。その地域が全部するかどうかはわからないが、経済界でいくらでもお手伝いする。それほどキャリア、キャリアということを言わなくても、大学の寸前になって決めてもいいと思う。例えば甲子園でも戦うということをやってくれば、社会に出れば必ず役に立つ。そこにキャリアが必要かということを経済界は考える。目的意識のない人たちをお手伝いしてほしいと言われたら、社会貢献という全く違う観点でバックアップする。学校は教育をしてくれて、その中で生徒の夢をお手伝いし、就職口も探してあげるということを、我々がその学校に行ったら、経済界も変わってくる。スキルを上げてもらうことに対する奨学金制度も持っている。そこまでやれる。経済界はそのような人づくりに決して臆病ではない。

(座長)

いろいろな会社の考え方であったり、経営状態も違ってくると思いますので、ライバル会社に対し

ては壁をつくるが、地元の小学校・中学校・高校に対しては企業は柔らかい優しい目で見ていることに関しては共通の認識を持っていただいてもいいのではないかと思います。なので、それこそ図々しく企業をお願いしていただいて、その中で協力いただけるかというのは企業の判断であると思いません。今日は非常に様々な角度から、それぞれの立場で議論をいただきありがとうございました。フリートークという形ですすめさせていただきましたので、議論もあちこちに行きましたが、今から私と事務局とで本日話していただいた内容を取りまとめる時間をいただき、委員のみなさまは休憩ということにして、再度お集まりいただきしたいと思います。

(副教育長)

本日話していただいたことを共有し、確認していただき、次回はどのようなことを中心にすすめていただくか事務局から提案したいと思います。

<まとめ協議／休憩>

(座 長)

それでは最後にまとめに移りますので、事務局からお願いします。

(事務局)

大きくは3つの議論があったと整理させていただきました。一つは、小・中・高等学校で発達段階を踏まえたキャリア教育が必要であるということ、一方で、小学校、中学校、高等学校と、神戸での例を出していただいたが、そのようなモデル的な発想も合わせて必要であるということです。二つ目はインターンシップ等を効果的に進めるためには、企業と学校とが双方に目的をはっきりさせて、何ができるかできないか等の具体的な提案をしっかりと伝え合うということもこれからのキャリア教育で必要ではないかということです。三つ目は企業と学校とをつなぐ行政との関係、市との連携、場の創出やネットワークづくりが大切であるということでした。すべて皆様方の意見を捕まえたわけではありませんが、大きくはこれら3つの視点があったと考えています。次回、第2回の日程調整はまだついていませんが、できれば専門家等の意見をお聞きしながら、今回の3つの視点、或いは今回課題として話しきれなかった部分あたりを、普通科のキャリア教育やマッチング等の話もありましたが、そういう点から専門家、或いは企業関係者の方も呼びして話をしていきたいと考えています。

(副教育長)

ゲストスピーカーとして今のところ事務局で考えているのはJR東海の会長をしておられた須田寛さんを第一候補に、第二候補は太田孝さん、三重県出身で近畿日本ツーリストの社長をされ、現在は東海大学の教授もされています。この方々にお声かけをさせていただき、何とか来ていただいて、新しい視点でキャリア教育の講演をいただき、そのあと議論をしていただく、或いは議論に参加していただくことを考えています。もし、このお二人で決まらない場合は、座長或いは会長と相談して決めさせていただきます。時期は八月の下旬から九月の上旬ということで考えていますが、何ぶんにもゲストスピーカーの都合を中心に考えさせていただきますので、ご協力をお願いします。

(座 長)

専門家の招聘については、山田会長と私と事務局の方で日程を調整しながら決めさせていただきますので、ご了承をお願いします。